

ゆとり教育の弊害

ゴールデンウィークも終わり、中学生はいよいよ第1回目の定期テストが目の前にせまってきました。どの学年もスタートダッシュを目指し、全力で取り組んでほしいと思います。

さて、ご存じのとおり、標題にあります「ゆとり教育」が終わりをむかえ、新学習指導要領が今年度から先行実施されることとなりました。7年前に算数・数学・理科で3割削減された内容がまた戻ってくるという訳です。いじめ増加の原因が詰めこみ教育にあると短絡的に決めつけて“ゆとり”を導入したかと思えば、世間の“ゆとり反対”の大合唱と国際学習到達度調査(PISA)の結果の悪さにあわてて元に戻す。今回の方向転換は教育現場に携わっている者にはゆとり導入の時点で十分予測できていたことではありましたが、政府の変わり身の早さには驚かされます。

しかしながら、こうした政府の指導方針の揺れに最も迷惑を被るのは他ならぬ子ども達です。ゆとり時間割で過ごさせられた子どもたちの大切な7年間は戻ってきません。子どもの教育には“その時”つけておかなければ後で身につけるのは大変な困難をともなうものがいくつもあります。例えばしつけ面而言えば、名前を呼ばれて返事をする事、「いただきます」「ありがとう」などのあいさつができること等、これらはもの心がつく前の0才からしつけておくと、一生どんな場面でも自然にできるものですが、逆に幼児期までにできていなければ後にしつけようと思ってもなかなか難しいものです。同じことが学習面でも多々あります。

最近の子どもたちを指導していて、「ゆとり教育の弊害だ」と痛切に感じるのは、まず計算力のなさです。3桁×3桁、3桁÷3桁がなくなってからの小学生のかけ算、割り算のできなさ、中学生の計算ミスの多さは目を覆うばかりです。さらに人の話の聞けなさ、文の読めなさ。テスト問題であっても設問をきちんと読んでいません。長文になると初めから気力を失う始末です。そして最後に論理的思考力の弱さ。粘り強く順々に考えていくということが苦手な子どもが成績に関係なく本当にたくさんいます。もちろんできている子どもごく一部にはいますが。

これらの力は小学生の間に鍛えて身につけておくべきものです。小一から先生の話をしっかり聞いて正しく読む習慣をつけ、高学年になったら骨のある問題にあたらせて論理的思考力を伸ばす。計算は複雑なものまでやらせて処理能力と注意力を鍛える。“ゆとり”は簡単なことしか小学生にさせず、伸びるはずの力をつぶしてしまいました。歯が生えそろう、かみ砕く機能がそろっていても、おかゆしか与えられなかったのと同じです。これでは顎も脳も退化します。